

## B会場（追補）

モダリティにみる主題の二ハ文

熊本県立大学大学院生 佐澤 有紀

格助詞二に係助詞ハが下接し、「体言(相当句)十二ハ十述語」という形をなすものを「二ハ文」と呼ぶこととする。格助詞に係助詞が下接する場合は、二ハ以外にも多く存在する。但し、係助詞が取り立てる前項が格助詞の機能を含むため、それらは純粹な主題としては成り立たず、通常は対比用法となる。しかし、二ハ文の中には、次のように主題用法と理解できる例が存在する。

熊本には阿蘇がある。

この場合、例えば「東京にはないが熊本には」という対比用法ともとれるが、「熊本」に「阿蘇がある」と単純に解説しているともとれる。このような二ハは、二とハの結合体から進んで、主題を表す二ハという位置づけができるのではないか。

係助詞ハは、その前項と後項を話し手の判断によって結びつけるという機能を持ち、そのために、ハ構文も二ハ文も判断文をなす。しかし、ハ構文が多様なモダリティ形式をとり得るのに対し、主題ととれる二ハ文のモダリティ形式はハとは異なる。

主題ととれる二ハ文には複数のパターンがあるが、それらはほぼ二類に分けられ、構文的な違いがみられる。仁田義雄の「判断文」と「現象描写文」とを二項対立的に設定するとき、それらは連続的な関係にあると考えられるが、現象描写文に近づくほどモダリティ形式は表れにくくなる。主題ととれる二ハ文のうち、一方の類は、そのような現象描写文のモダリティ形式の現れ方に近い。もう一方の、二ハの前後二項が「目的・手段」という関係をもって結びつく例の場合、モダリティ形式はほぼハ構文と同様の多様さを持つ。

誰かに顔を見られたくない人間が歩くには、最高の天気だ。

本邦文献に見られる漢語受容の一形態 —— 「無心」の語史を通して ——

九州大学大学院生 張 愚

本発表では、各時代の文献資料に見られる漢語「無心」の意味・用法の変化に注目し、それらの変化がどのように生じたのかを考察した。その結果、次のような事実が明らかになった。

I 上代・中古の和文資料には、「思いやりがない」の意にあたる「無心」という漢語が数多く見られるが、それに対し、中古・中世の漢文体史料には、中国出自の「無心十二字熟語」という用法が主用されている。これは、意味論的には「第三者はくする気がない」という意志表現に相当する用法と考えられる。

II 和文資料に見られる「思いやりがない」の用法は、時代が下るにつれて、古記録をはじめ、各時代の漢文体史料に浸透してきたことが窺われる。その中で、中世以降の古文書には、和文資料における「無心」の意味を取り入れたうえで一種の対人配慮表現が発生した。すなわち、これは、「無心」がその前段階として「思いやりがない・思慮が足りない」ということから、「事前の深い思慮がないこと」によって、相手に迷惑を掛けた」という意味に変化したということである。この用法は、やがて中世以降の和漢混淆文や口語資料にも影響を与えるようになった。

III ここでいう「相手に迷惑を掛ける」の意にとれる中世の例文は、その殆どが相手に物や金銭をお願いする際に用いられている。中世後期以降の用例には、それに関する情報が、自明のこととして省略されていることが多い。これらの事象は、この時代の「無心」の意味が専ら「物や金銭を強請る」に特定されるようになったことを物語っている。

IV 上述の諸用法と異なつて、本邦文献には、「一切の妄念に捉われなくて、自然のままに振る舞う状態」を意味する「無心」の用例も存在する。これらの「無心」は、品詞的には様態を表す副詞用法として捉えられるが、仏教用語である名詞「無心」から派生したものであって、前述の「無心」の諸用法とは、全く異なる受容のルートを辿って成立したものと考えられる。